

大学生の主張行動および対人ストレスコーピングが 友人満足感に及ぼす影響⁽¹⁾

坂田 瑞樹*・松田 英子**

要 約

本研究の目的は、対人ストレスコーピング、主張行動、および自尊感情が友人関係満足感にどの程度影響するかを調査により検討することであった。大学生128名（男性73名、女性55名）が、①大学生用対人ストレスコーピング尺度、②青年用アサーション尺度、③自尊感情尺度、④友人関係満足感尺度から構成される質問紙調査に回答した。重回帰分析の結果、ストレスコーピング尺度のポジティブ関係コーピング因子、自尊感情、関係形成主張行動の順で友人関係満足感に正の影響を与えていた。共分散構造分析の結果から、説得交渉主張行動に関しては、自尊感情を媒介して友人関係満足感に影響することがわかった。

これらの結果から、日本人大学生では、主張行動と対人ストレスコーピングを強化することが友人関係満足感を高めるために有効であることが示唆された。

キーワード：対人ストレスコーピング、主張行動、自尊感情、友人関係満足感

1. 問題と目的

青年期の親密な友人関係は、精神的健康を維持する機能を有する重要な対人関係である⁽¹⁾ため、個人の生活の質（quality of life）の向上に肯定的な影響を与えると考えられる。親密な友人関係の形成には、自己表現をし、相手との率直なコミュニケーションが必要と考えられるが、一方で斎藤⁽²⁾は自己表現しないことが美德であるといった独特の因習が日本に存在したことを指摘しており、日本文化では適応的に自己表現することが難しい。本研究では先行研究を整理した上で、友人関係満足感を高める要因として、主張行動（assertive behavior）、対人ストレスコーピング（interpersonal stress-coping）、自尊感情（self-

esteem）の3要因に注目した。以下に各要因と友人関係の関連について述べる。

まず平木⁽³⁾は、主張行動を「自分の気持ち、考え、信念などを正直に、率直に、その場にふさわしい方法で表現し、相手と同じように発言することを奨励する行動」と定義し、他者との良好な関係を維持するために重要な行動と指摘している。柴橋⁽⁴⁾は思春期・青年期には、友人関係を良好に維持する上で、主張性（assertiveness）が特に重要な役割を果たすと指摘している。榎本⁽⁵⁾は、青年期の友人関係における欲求を調査した結果、高校生までは「親和欲求」が強いが、大学生ではさらに「相互尊重欲求」が加わることを示した。また渡部・松井⁽⁶⁾は、主張行動の際に不安感などを持たずにコントロールできる「情動制御」や自分の意見や考えの「素直な表現」が出来る程、友人関係満足感を高め、これらが出来ないと友人関係満足感を低めるという知見を示した。すなわち友人関係において相互尊重を実現するためには、主張行動が要となり、非主張的行動や攻撃的

2015年11月30日受付

* 江戸川大学 社会学部人間心理学科卒業生 医療法人みなみつくば会 社会福祉学

** 江戸川大学 人間心理学科非常勤講師・東洋大学社会学部教授 臨床心理学

行動になる場合、友人関係満足感を低めると予想される。本田⁽⁷⁾では、友人から嫌われることを避けるために相手優先のコミュニケーションを多くとっている場合には、友人関係満足度が低下していたことを調査によって確認している。このことは、友人に対し非主張行動をとる場合には友人関係満足感が低いことを示唆している。これらのことから、非主張的及び攻撃的行動は友人関係に直接的に否定的な影響を与えると予想される。玉瀬ら⁽⁸⁾は、アサーションにおける日本国内外の研究を参考に、相手と良い関係を形成する関係形成因子と相手との葛藤場面において自分の立場を守る説得交渉因子からなる日本人の青年用のアサーション尺度を作成した。そこで本研究において、主張行動を友人関係形成促進要因の1つとして着目し、主張行動を関係形成因子と説得交渉因子に分けた上で検討する。

次に友人関係を維持するためには、生じうる対人ストレスに対して適切に対処しなければならない。原口・尾関・津田⁽⁹⁾が、「最もストレスを感じていること」について大学生を対象に調査を行った結果、人間関係に関するストレスを挙げた被調査者は全体の23.8%で第1位であった。このことから、友人との間に生じたストレスに対処する行動、すなわち対人ストレスコーピングも友人関係満足感に影響する重要な要因の1つであると考えられる。加藤⁽¹⁰⁾では、ストレスフルライフイベントに対して個人が使用するコーピングは異なるが、イベントを統制すると、使用するコーピング方略は個人において比較的安定しているためコーピングの個人差を測定しようとして、大学生用対人ストレスコーピング尺度を作成した。また加藤⁽¹¹⁾による、対人ストレスフルライフイベントが個人の精神的健康に及ぼす過程を検証する研究において、ストレスコーピングと友人関係に関する主観的満足感のパス解析の結果から、積極的に関係を改善しようとするポジティブ関係コーピング及び問題に対して無視しようとする解決先送りコーピングから友人関係満足感には正の影響が、関係を放棄・崩壊しようとするネガティブ関係コーピングから友人関係満足感へは負の影響が

見られた。つまり、ストレスコーピングが友人関係満足感に影響を与える要因であると指摘されている。

さらに、より深い相互作用を伴う友人関係においては、ありのままの自己と他者を受容する関係が望ましい。その際に重要な要因として、自己評価に関する概念である自尊感情があげられる。自尊感情とは「自己に対しての肯定的または否定的態度」と定義される⁽¹²⁾。一方、自己受容とは「ありのままの自分を受け入れる」と定義されており⁽¹³⁾、自尊感情とは類似した概念であるが、Leary, Tambor, Terdal, & Downs⁽¹⁴⁾は、自尊感情は他者から受け入れられることで上昇し、他者との関係を改善するための行動をさらに動機づけると仮定している。よって、より深い相互作用を伴う友人関係を築くには、自尊感情が重要であると予測した。また、豊田・松本⁽¹⁵⁾では、大学生の自尊感情に影響を与える重要な要因として、過去の学校生活や現在の大学生活における友人関係を取り上げ、調査により自尊感情と友人関係における信頼感の間に正の関係を見出している。さらに、前述した主張行動には自尊感情を高める効果が指摘されており⁽¹⁶⁾、主張行動には自尊感情を媒介して友人関係満足感を高める間接的効果があると考えられる。関口・三浦・岡安⁽¹⁷⁾では、主張行動の断る力と対人劣等感の間で負の相関関係があることを報告している。主張行動の断る力は主張行動の説得交渉主張行動に含まれる要因であり、対人劣等感自尊感情を低める要因であるため、説得交渉主張行動と自尊感情には正の関連があると予測される。一方で吉岡⁽¹⁸⁾は、中学生から高校生を対象に、「友人関係の満足感」と「友人関係の理想と現実のズレ」及び「自己受容」との関連を検討した。その結果、友人関係の理想と現実のズレが大きいほど友人関係満足感が低く、自己受容をしている人ほど友人関係満足感が高くなった。また、先行研究では友人関係の理想と現実のズレを説明変数として用いていたが、平木⁽¹⁹⁾は、自己理解において自分の思いと実際の行動・現実の結果が不一致の状態が続くことは、欲求不満のもとになりやすく、自信がなくなり、不全感を抱

くことになる」と指摘している。このことから理想と現実のズレが小さい友人関係は深い相互作用を伴う友人関係であると考え、本研究では友人関係満足感に加えもうひとつの目的変数として検討することにした。

以上のことから、友人関係満足感に促進的な影響を与える要因として、主張行動、対人ストレスコーピング、自尊感情があると予測される。しかし、先行研究では、友人関係満足感に影響を与える要因として、それぞれ単独での検討を試みていた。さらに、我が国においては主張行動の効果についての事例研究など実践面が先行し、基礎的な資料としての研究面が遅れているとの指摘を踏まえ⁽²⁰⁾、本研究では、大学生を対象に、主張行動、対人ストレスコーピング、および自尊感情は友人関係満足感に直接影響し、主張行動は自尊感情を媒介して友人関係満足感に影響を与えるような関連性があると仮定し、友人関係満足感に友人関係の理想と現実のズレを加え、これら3要因と関係がみられるか、また関係がみられる場合はどのようなプロセスを経て影響を与えるかについて、探索的に検討することを目的とした。

2. 方法

2.1 調査時期と対象者

2013年6月に首都圏にある私立大学学生129名に無記名での質問紙調査協力への承諾を得た。そのうち、回答の不備が見られた1名を除外した128名(男性73名、女性55名;平均年齢19.9歳、SD ± 0.97)のデータを分析対象とした。

2.2 調査内容

質問紙は以下の尺度から構成されていた。

2.2.1 対象者の基本属性(フェイスシート)

調査目的、調査内容、個人情報保護、回答によって不利益が生じないことについて明記し、口頭で再度説明を行った。対象者の基本属性について、性別、年齢を尋ねた。

2.2.2 青年用アサーション尺度

主張行動の程度を測定するため、関係形成8項目と説得交渉8項目の2因子からなる青年用アサーション尺度16項目⁽⁸⁾を使用した。「まったくそうしない(1点)」から「必ずそうする(5点)」までの5件法で評定しており、得点が高いほどアサーティブであることを示す。第1因子「関係形成」は、「好意を持った相手には自分から話しかける」など、相手との良い関係を形成する主張行動の項目から構成されている。第2因子「説得交渉」は、「友達の都合を一方的に押し付けられた時は断る」など、葛藤場面において相手に対して説得や交渉を行う主張行動の項目から構成されている。

2.2.3 自尊感情尺度

自尊感情を測定するために、Rosenberg⁽¹²⁾による自尊感情尺度を邦訳したもの10項目⁽²¹⁾を使用した。「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」の5件法で評定しており、得点が高いほど自尊感情が高いことを示す。

2.2.4 対人ストレスコーピング尺度

大学を入学してから現在まで友人との間に生じたストレスに対するコーピングの程度を測定するために、対人ストレスコーピング尺度34項目⁽¹⁰⁾を使用した。「あてはまらない(0点)」から「よくあてはまる(3点)」の4件法で評定しており、得点が高いほど生じたストレスに対するそれぞれのコーピングの機能が低いことを示す。第1因子「ポジティブ関係コーピング」は、「積極的に話をするようにした」など肯定的に人間関係を成立・改善・維持するため努力する機能を測定する項目から構成されている。第2因子「ネガティブ関係コーピング」は、「かかわり合わないようにした」「相手を悪者にした」など人間関係の形成を放棄・崩壊する機能を測定する項目から構成されている。第3因子「解決先送り関係コーピング」は、「気にしないようにした」などストレスフルな人間関係を無視・回避する機能を測定する項目から構成されている。

2.2.5 友人関係満足感尺度

友人関係に関する主観的満足感を測定するために、友人関係満足感尺度6項目⁽¹¹⁾を使用した。「あてはまらない(0点)」から「よくあてはまる(3点)」の4件法で評定しており、それぞれの得点が高いほど友人関係に満足していることを示す。

2.2.6 友人関係の理想と現実

友人関係の理想と現実およびその差を測定するために、友人関係測定尺度54項目⁽¹⁷⁾を使用した。「全然あてはまらない(1点)」から「非常に当てはまる(4点)」の4件法で評定しており、理想から現実を引いた差得点が高いほど理想と現実の友人関係にズレが大きいことになる。「考えたことや感じたことを正直に話すことができる」などの質問項目に対し、理想得点は「あなたがこうあってほしい、こうでありたいと思う友達との理想のつきあい方はどのようなものですか」と教示し、現実得点は「あなたの日頃の友達づきあいについてどの程度当てはまりますか」と教示し、それぞれ評定を求め算出した。理想と現実のズレは、それぞれの差得点とした。

2.3 データの処理方法

得られたデータはSPSS Statistics 19, Amos Basic ((株)日本IBM)にて分析を行った。

まず、各変数と性差について検討するためt検定を行った。次に、各変数の関連を検討するため

に相関係数を算出した。さらに、友人関係満足感や友人関係の現実および理想と現実のズレに対する各変数の影響を検討するため、重回帰分析およびパス解析を行った。

3. 結果

3.1 基礎統計量と性差

主張行動尺度の説得交渉因子と関係形成因子、自尊感情尺度、対人ストレスコーピング尺度のポジティブ関係コーピング因子、ネガティブ関係コーピング、解決先送り関係コーピング因子、および友人関係尺度の満足感、理想と現実のズレについて、方法で述べた手続きに従い、それぞれの合計点、因子別得点、平均点および標準偏差を算出し、性差の比較を行った(表1)。その結果、主張行動説得交渉得点($t(128)=3.32, p<.001$)、主張行動合計得点($t(128)=2.61, p<.01$)、自尊感情($t(128)=2.44, p<.05$)に性差が見られ、いずれも女性に比べ男性の得点が有意に高いことが示された。それ以外のいずれの尺度には性差が認められなかった。

3.2 各変数間の相関分析

3.2.1 変数間の単相関分析

各変数の関連性を調べるため、全尺度の合計点得点および下位尺度間のPearsonの相関係数を算出した(表2)。その結果、関係形成主張行動、

表1 各変数の基礎統計量

尺度	因子	全体 (N=128)		男性 (N=73)		女性 (N=55)		t 値
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
A アサーション	関係形成	27.53	5.03	28.03	4.67	26.87	5.46	1.29
	説得交渉	24.84	4.49	25.95	4.32	23.38	4.34	3.32***
	合計	52.38	8.16	53.97	7.44	50.25	8.65	2.61**
B 自尊感情		26.71	8.23	28.22	8.01	24.71	8.15	2.44*
C ストレス コーピング	ポジティブ	26.76	9.89	26.71	9.65	26.82	10.3	-0.6
	ネガティブ	8.33	6.36	8.25	6.8	8.44	5.79	-0.17
	解決先送り	13.7	5.9	13.74	6.19	13.64	5.53	0.1
D 友人関係	満足感	8.48	4.67	8.52	4.9	8.44	4.4	0.1
	理想	83.79	13.43	83.23	12.27	84.53	14.9	-0.54
	現実	74.43	16.35	73.12	14.25	76.16	18.77	-1.04
	ズレ	9.36	14.55	10.11	11.47	18.36	17.9	0.67

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

説得交渉主張行動, 自尊感情, ポジティブ関係コーピング因子と友人関係満足感に有意な正の相関が示された(順に, $r=.498, p<.01$; $r=.309, p<.01$; $r=.400, p<.01$; $r=.566, p<.01$)。また, 関係形成主張行動, 説得交渉主張行動, およびポジティブ関係コーピング因子と現実の友人関係得点に有意な正の相関(順に, $r=.476, p<.01$; $r=.267, p<.01$; $r=.507, p<.01$), 友人関係の理想と現実のズレ得点に有意な負の相関が示された(順に, $r=-.217, p<.05$; $r=-.177, p<.05$; $r=-.198, p<.05$)。

3.2.2 友人関係満足感に関する分析

各々の尺度の得点が友人関係満足感得点に与える影響を検討するため, 重回帰分析(強制投入法)を実施した(表3)。その結果, 重相関係数(R)は.66, 重決定係数(R²)は.43であり, 標準回

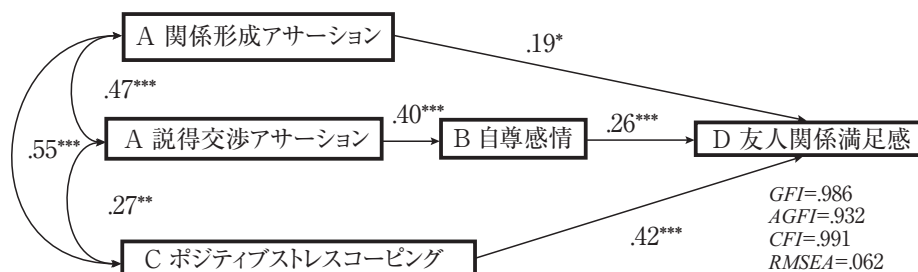
帰係数の検定の結果, 関係形成主張行動($\beta=.171, p<.10$), 自尊感情($\beta=.257, p<.01$), ポジティブストレスコーピング($\beta=.421, p<.001$)の変数とそれぞれ有意であった。また, 説得交渉($\beta=.010, n.s.$), ネガティブ関係コーピング($\beta=.004, n.s.$), 解決先送り($\beta=.044, n.s.$)とは関連が認められなかった。すなわち, ポジティブ関係コーピング, 自尊感情, 関係形成主張行動の得点が高いほど, 友人関係満足感得点が高くなることを示した。

さらに, 友人関係満足感と関連のある要因がどのように作用するかを検討するため, Amosを用いたパス解析を行った(図1)。関係形成主張行動の自尊感情を媒介する間接効果を示すパスと, 重回帰分析の結果から友人関係満足感と関連がみられなかった3要因, すなわち説得交渉主張行動,

表2 各変数の単純相関結果

	A		B		C			D			
	関係形成	説得交渉	自尊感情	ポジティブ	ネガティブ	解決先送り	満足	理想	現実	ズレ	
A アサーション											
関係形成	1.00										
説得交渉	.466**	1.00									
B 自尊感情	.337**	.401**	1.00								
C ストレスコーピング											
ポジティブ	.549**	.275**	.195	1.00							
ネガティブ	-.005	-.109	-.250	-.119	1.00						
解決先送り	.115	.025	.003	-.029	.414**	1.00					
D 友人関係											
満足感	.498**	.309**	.400**	.566**	-.094	.054	1.00				
理想	.344**	.133	.107	.403**	-.192	-.023	.396**	1.00			
現実	.476**	.267**	.227	.507**	-.186	-.018	.631**	.537**	1.00		
ズレ	-.217*	-.177**	-.156	-.198*	.032	-.001	-.343**	.319**	-.628**	1.00	

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$



GFI=.986
AGFI=.932
CFI=.991
RMSEA=.062

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p=.01$, *** $p<.001$

図1 パス解析による友人関係満足感モデルの検証

表3 主張行動、自尊感情、ストレスコーピングと友人関係に関する要因との重回帰分析結果

説明変数			目的変数	
			D 友人関係	
尺度	因子		満足感 β	理想と現実のズレ β
A	アサーション	関係形成	.171 †	-.099
		説得交渉	.01	-.072
B	自尊感情	合計点	.257**	-.076
C	ストレス コーピング	ポジティブ	.421***	-.111
		ネガティブ	.004	-.016
		解決先送り	.044	.016
R2			.431***	.068

† p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

ネガティブ関係コーピングおよび解決先送り関係コーピングの直接効果を示すパスを除いた、関係形成主張行動およびポジティブストレスコーピングが友人関係満足感に直接影響を与え、説得交渉主張行動が自尊感情を媒介して間接的に友人関係満足感に正の影響を与えるモデルが最も良い適合度を示した (GFI=.986, AGFI=.932, CFI=.991, RMSEA=.062)。

3.2.3 友人関係の現実および理想と現実のズレに関する分析

次に、各変数が友人関係の理想と現実のズレ得点に与える影響を検討するため、重回帰分析(強制投入法)を実施した(表3)。その結果、重相関係数(R)は.26、重決定係数(R2)は.07であり、各変数との関連が認められなかった。

4. 考察

4.1 主張行動、自尊感情、対人ストレスコーピング、友人関係満足感の検討

本調査で検討した変数の性差において、一部説得交渉主張行動得点と主張行動合計点および自尊感情の合計点では、男性の方が高く、女性は低いことが示された。柴橋⁽²²⁾は、男性の方が相手と対立を招く可能性があっても自分の権利を守る「不満・要求の表明」を行う傾向が強いと指摘しており、また、Hollandsworth & Wall⁽²³⁾は、男性的性役割を持つ者は対人的な葛藤におけるネガティブな感情表出を行うと指摘している。この

ことは、男性の方が女性より対人ストレス場面において主張行動、とくに説得交渉が多いといった本研究の結果からも追認された。

重回帰分析の結果から、ポジティブ関係コーピング、自尊感情、関係形成主張行動が友人関係満足感に正の影響がみられ、説得交渉主張行動、ネガティブ関係コーピング、解決先送り関係コーピングは友人関係満足感への影響がみられなかった。また、主張行動、自尊感情、ストレスコーピングの3要因において、友人関係の理想と現実のズレへの影響がみられなかった。これらを踏まえ、友人関係満足感のみを対象としてパス解析を行った。パス解析の結果から、ポジティブ関係コーピング、自尊感情、関係形成主張行動の順に友人関係満足度に肯定的な影響を与えることが示された。関口・三浦・岡安⁽¹⁷⁾の主張行動の断る力と対人劣等感との間で負の相関関係がみられた知見と、主張行動のうち断る力を含む説得交渉主張行動が自尊感情に影響した、本研究の結果は類似している。

大学生にとって対人関係でのストレスが避けられない問題である以上、ポジティブ関係コーピングから友人関係満足感に対しての強い影響があるという指摘⁽¹¹⁾は、本研究においても追認された。加藤⁽⁹⁾ではこの理由として、「相手のことをよく知ろうとした」など他者配慮の姿勢が、良好な友人関係を築き、友人関係満足感を上げると考察している。他者への配慮は、主張性を構成する重要な要件の1つである⁽⁶⁾。本研究において、大学生の友人関係満足感を説明するモデルに、ポジテ

イブ関係コーピングと関係形成主張行動および説得交渉主張行動が重要な変数として含まれていることから、大学生では、それ以前の生徒の友人関係で重視される親和的な関係のみならず、友人関係が互いの違いを理解した相互的な関係へと発達の変化を遂げるという知見⁽⁵⁾を裏付けていると言える。

4.2 今後の課題

本研究では先行研究で明らかとなっている友人関係満足感を高める要因の関連性とそれらの要因がどのようなプロセスで友人関係満足感に影響するかについて、探索的に検討した。主張行動に関しては、関係形成主張行動は直接的に、説得交渉主張行動は、自尊感情を通して間接的に友人関係満足感を向上させるという知見が得られた。よって、これらの知見に基づき、友人とのコミュニケーションを想定した主張訓練の介入が友人関係満足感の上昇に効果があるかについて実験的に検討することを今後の課題とする。

参考文献

- (1) 松井豊, 友人関係の機能 齊藤耕二・菊池章夫(編) 社会化の心理学 ハンドブッカー—人間形成と社会と文化— 川島書店, Pp.283-296, 1990.
- (2) 斎藤美津子, なぜ日本人は自己表現が下手なのか, 金子書房 47 (16), 1550-1555, 1993.
- (3) 平木典子, 改訂版 アサーション・トレーニング—さわやかな「自己表現」のために—, 日本・精神技術研究所, 2009.
- (4) 柴橋祐子, 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について, カウンセリング研究 31 (1), 19-26, 1998.
- (5) 榎本淳子, 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連, 教育心理学研究 48 (4), 444-453, 2000.
- (6) 渡部麻美・松井豊, 高校生時と大学生時における主張性の4要件と友人関係満足感との関連, 対人社会心理学研究 11, 35-42, 2011.
- (7) 本田周二, 友人関係における動機づけが対人葛藤時の対処方略に及ぼす影響, パーソナリティ研究 21 (2), 152-163, 2012.
- (8) 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景, 他, 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討, 奈良教育大学紀要 50 (1), 221-232, 2001.
- (9) 原口雅浩・尾関友佳子・津田彰, 大学生の心理的ストレス過程—ストレスに対する認知的評価とコーピングおよびストレス反応—, 九州大学教養部心理学研究報告 10, 1-16, 1992.
- (10) 加藤司, 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成, 教育心理学研究 48 (2), 225-234, 2000.
- (11) 加藤司, 対人ストレス過程の検証, 教育心理学研究 49 (3), 295-304, 2001.
- (12) Rosenberg, M., *Society and the adolescent self-image*. New Jersey: Princeton University, Press 1965.
- (13) 沢崎達夫, 自己受容に関する文献的研究 (1) —その概念と測定法について—, 教育相談研究 22, p59-68, 1984.
- (14) Leary, M.R., Tambor, E.S., Terdal, S.K., Downs, D.L., Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis, *Journal of Personality and Social Psychology*, 68 (3), 518-530, 1995.
- (15) 豊田加奈子・松本恒之, 大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究, 東洋大学人間科学総合研究所紀要 創刊号, 38-54, 2004.
- (16) 對馬淑乃・松田英子, 特性シャイネス及び感情表出の制御が友人関係満足感及び友人行動量に及ぼす影響, ストレス科学研究 27, 55-63, 2012.
- (17) 関口奈保美・三浦正江・岡安孝宏, 大学生におけるアサーションと対人ストレスの関連性: 自己表現の3タイプに着目して, ストレス科学研究 26, 40-47, 2011.
- (18) 吉岡和子, 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感, 青年心理学研究 13, 13-30, 2001.
- (19) 平木典子, 自己カウンセリングとアサーションのすすめ, 金子書房, Pp.52-54, 2000.
- (20) 沢崎達夫, 青年期女子におけるアサーションと攻撃性および自己受容の関係, 目白大学心理学研究 2, 1-12, 2006.
- (21) 山本真理子・松井豊・山成由紀子, 認知された自己の諸譜面の構造, 教育心理学研究 30 (1), 64-68, 1982.
- (22) 柴橋祐子, 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち, 発達心理学研究 12 (2), 123-134, 2001.
- (23) Hollandsworth, J.G., Wall, D., Sex differences in assertive behavior: An empirical investigation, *Journal of Counseling Psychology*, 24, 217-222, 1977.

英文要約: The purpose of the present study was to examine the relationships among assertive behavior, interpersonal stress-coping, and friendship satisfaction in Japanese university students. One hundred and twenty-eight students (73 males and 55 females) who lives in Japan, completed a) interpersonal stress-coping inventory for undergraduates, b) assertion scale for adolescents, c) self-esteem scale, and d) friendship satisfaction scale. The results showed the strongest effect of positive stress-coping on friendship satisfaction by multiple regression analysis. Both self-esteem and assertion for relation-formation also were significantly related with friendship satisfaction. By covariance structure analysis, assertion for persuasion-negotiation

effected friendship satisfaction mediated by self-esteem. These findings suggest that intensify assertive behavior and interpersonal stress-coping skills were effective for enhancing the degree of friendship satisfaction in

Japanese university students.

Keywords: interpersonal stress-coping, assertive behavior, self-esteem, friendship satisfaction